慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジヨン・ラスキンの奢侈論（一）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.5 (1922. 5) ,p.667(87)- 678(98)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220501-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三月	一、一八八	九〇一	一月	二五、一三九	六月　三五、三九二
四月	一、一七一	八九四	二月	三一、八二七	七月　四五、六五四
五月	一、一五二	八八〇	三月	三二、八八二	八月　五三、一〇〇
六月	一、一七五	八九六	四月	三一、七一〇	九月　六〇、七二八
七月	一、二七四	九六三	五月	三二、六三九	十月　七五、一八一
八月	一、三九九	一、〇四五			
九月	一、四一八	一、〇六二			
十月	一、五三二	一、一四六			
十一月	一、九一四	一、九七三			
十二月	二、〇八八	一、五五〇			
一月（一九二二年）	二、二一九				

食料品は今年の一月には戰前より一、九八八即ち二十倍半以上昨年中には七二三の奔騰である一般生活費に於ては昨年の十二月には戰前に比し一、四五〇即ち十五倍半一ヶ年中に六〇六の騰貴であるたゞ茲に一言すべき事は獨逸の家賃である家賃は法律で制限してあるので戰前に比して僅かに三〇％しか騰貴して居らぬ

波蘭

波蘭に於ける四人家族の勞働階級の食料品指數を次に列記せん

家賃	二〇〇	三八〇	六〇〇		
燈燃料等	五、〇〇〇	五、三〇〇	一〇、七〇〇		
其他	五、三〇〇	六、七〇〇	一三、五〇〇		
平均	八、一〇〇	九、八〇〇	二〇、五〇〇		

十一月には平均が二五、〇〇即ち戰前の二百五十倍である尙一九二一年の年始と年末の小賣相場の對比を見ては駭心銷魂する外ない、

	一月一日	十二月三十一日	對比
	（單位グローネ）		
麭麵（二封度）	六	七三	一二倍
牛肉（一キログラム）	二〇〇	一、一〇〇	五五倍
豚脂（一キログラム）	三〇〇	二、二〇〇	七倍
馬鈴薯（一キログラム）	七・二〇	九〇	一二倍
卵（一個）	一一	一五〇	一四倍
瓦斯（一立方メートル）	五	六〇	一二倍
石炭（一キログラム）	四・二〇	四〇	九倍
木炭（一キログラム）	二・七〇	二五	九倍

即ち一ヶ年中に多きは五十五倍より少きは七倍と云ふ驚くべき奔騰である、尙電車は一月一日に三クローネであつたものが十二月三十一日には三十クローネとなつた生活費の金額から云ふと戰前（一九一四年七月）には下級の生活費は四人家族で一ヶ月一六三クローネであつたものが一九二一年の一月には一〇、三七五クローネとなり同年の十二月末には九七、三七五クローネとなつた。

（一九二二年二月二十三日稿）

ジョン・ラスキンの奢侈論（一）

奥井復太郎

佛蘭西の經濟學者ジード氏は富（wealth）と云ふ言葉には享樂（enjoyment）と云ふ觀念の外に權力（power）と云ふ觀念が含まれてゐると說く。富を追求するに當つて若し單に消費的享樂丈けが齎されるものとすれば享樂には一定の限度があ

る故に富の追求は其の限度以上に達する事はない。然し人間をして無制限に富の獲得に努力せしめ世間で普通に石油王とか鋼鐵王とか綿絲王なぞと呼ばれてゐる亞米利加のミリオネアを生み出すに至つたのは洵に富と云ふものの他の方面を即ち人間や物に對して加へうる權力を欲求するによる。（英譯、經濟學－亞米利加版緒論第二章第二節參照）

ジード氏の云ふ如く消費享樂用としての富に置きう可き限度が果して容易に指示しう可き(assignable)ものであるや否やは疑問とするも現在の社會に於て富の所有が權力意識を伴ひ更に權力意志が富の集中を通じて現れるのも事實であり其が又大工業主義の現代の一特徴とも云ふ可きであらう。

近世社會主義は斯くの如き關係に於ける富、即人間の上に人間に依つて行使される權力の道具としての富を廢止し樣と企てるものであるとジード氏は云つてゐる（前掲書）。洵に資本と云ふ形體に現された富は權力關係を明白に示して居る樣に思はれる。一七六〇年から一七八五年の間に產業の近代的組織の基礎が置れた生產技術や運輸交通の施設に生じた變化は社會狀態に大なる影響を及ぼして民衆の生活は異常なる變化を受けた。此の時代の一特色は工業の大規模なる集中現象であり又從つて大なる工業都市の發達であつた。地方村落の工業は悉く都市に移り工場生產は家內仕事を壓倒した、機械は人間の腕に立ち替つた、大なる製造工業の中心地は稠密なる人口を有する都會となつて此處にむれ集つた勞働者を收容する爲めに無方針に建築された街衢は所謂貧民窟(slum)として無產的勞働者の悲慘なる生活を展開した、斯くの如き悲慘なる生活が比較的狹い地域內に展開され其の對照に莫大なる資本を擁して是等工場を經營して行く所謂資本家なるものが存在する場合、世人は如何に金力の偉大なるを渴仰し或は其橫暴を呪ふた事であらうか。多感なる藝術家であり藝批評家であつたジョン・ラスキンが斯かる社會狀態殊に富者の無知と橫暴とに對して深刻な憎惡の念を懷いた事は想像するに難くない。此の憎惡の念は彼をしてかゝる耐ふ可からざる社會生活を理論づける當時の經濟學に對して熱烈なる攻擊を加へしめた。當時の經濟現象を理論的に說明し樣とする經濟學は新しく勃興せる商工業階級の奴隸となつてしまつて資本家階級の利益擁護の學說を打ちたてたものとされ Political economy と云ふ名稱よりも寧ろ mercantile economy の名稱を適當とするものと考へられた。筆者は今此處に科學としての經濟學に對するラスキンの攻擊に就いて及び彼の唱へる經濟學の新しき內容に就いて詳論する餘裕はない。しかしラスキンの數書を讀む者は彼の經濟論が當時の（或は現在にも適用されるであらうが）社會生活殊に經濟生活に對する批評としては何等疑問の餘地のない事を見出すであらう。此の故にカーライル、ジョン・スチュアト・ミル、エマアソン、マシュウ・アーノルド、ハアバアド・スペンサアにジョン・ラスキンを加へて Modern Humanists: sociological studies of Carlyle, Mill, Emerson, Arnold, Ruskin, and Spencer. を著した John M. Robertson がこの書の前身である一八九一年ロンドンの South Place Ethical Society でなした講演に Modern Criticisms of Life と云ふ題を附したのは妥當である。（同書序文參照）

斯くの如く資本の强大なる權力を眺めたラスキンが富は人間の手に委ねられた一つの大なる力であると考へたのは當然である。

A Joy For Ever の中に收められた一八五七年の彼の講演の最初に於いてラスキンは富と貧とを論じて現代の社會が貧困と云ふものに對して加へる輕蔑は正當にして且つ健全なる考であると喝破してゐる。(I repeat, the *just* and *wholesome* contempt; though I see that some of my hearers look surprised at the expression)

古代、希臘羅馬の時代には自から進んで桶の中に生活し眞面目に桶の中の生活が都會の生活に優れる事を主張する者が在つたと同時に希臘人及び羅典人は是等の奇人を吾人が大資本家や大地主に對して拂ふが如き尊敬を以つて眺めた。故に是等の時代に在りては何人も財囊を矜るものなくたゞ空の財囊を矜るものとして描かれてゐる。而して是等の自信深き貧者に對して希臘人が拂つた名譽の甚しかつたと共に彼等が富者に就いて語る時の不遜極まる態度も著しかつた。更に中世期に於いては富は其の時代の優れたる人々に依つて輕蔑す可きものと認められた以上に罪惡であると考へられた。ダンテの神曲の地獄(Inferno)に於いては高利貸(usurers)は頸の周圍に財囊を纏ふて罰せられてゐる。そして貧困の精神が尊ばれはのである。(A Joy For Ever, Lecture I, §§ i-iv)

實にかゝる感情から離れ其の偏頗を以つて誤謬であると公言するには可なり勇氣を必要とするとラスキンは云ふ。

『然し吾々はかく公言しなければならないのである。蓋し富は人間の手に委ねられ得た最も大なる力の中の一つに過ぎない。其は殆ど吾々を幸福にするものでないが故に決して嫉まる可き力でもなく又更に放棄或は輕んぜられる可きものでもない。今日に於いて、此の國に在ては、一人の富者の財産は昔の如く黄金の鎖や寶石の匣の夥多に依つて表はされるに非ずして、其の財産が種々の方面に使役する多くの人々によつて表はされ、從つて是等の人々の肉體及び精神の上に、富は其の指揮の如何によつて或は有害なる或は有益なる影響を及ぼしかくて其の何れかによつて不正或は公正何れかの富(Mammon)となるが故に、富は尚ほ一層に顯著なる力となるのである。』(ibid § iv)

之れに依つて既に吾々はラスキンの富の倫理的觀察を窺ふ事が出來る。ラスキンは富に對して大なる敬意を拂つてはゐるが其は單に經濟學上の富(wealth)や商業主義的富ではない。富に對するラスキンの觀念は他の機會に讓るが彼の周知な言葉「生命を除いて他に何等富ある事なし」(There is no wealth but life)と云ふ文句によつて大體の觀察は得られ樣。ラスキンが敬意を拂ふ富は眞の富(true wealth)であつて決して false wealth (虚僞の富)ではない (A Joy For Ever, Lecture I, § iv 參照)。然し貧困に就いて述べた彼の主張(前承)は決して理由のないものではない。美の追求者としての彼は貧困、卑賤なる生活より決して美化されたる生活や美の創造は生れないと考へる。之れが美術批評家であつたラスキンが一八六〇年(Unto This Last に收められた四論文が Cornhill Magazine に載せられた年)を境として社會生活の批評家として社會改造の行程に踏み出した根本的の動機である (J. A. Hobson, Ruskin as Political Economist, edited in "Ruskin The Prophet": Frederic Harrison, John Ruskin, ch. viii., As Social Reformer 參照)。ハリソン自からも云ふ如くラスキンは一八六〇年に於て急に社會思想家としての意見を發表したのではない。ハリソンは此の年を以つて the formal opening of his career in social refo-

rm と云つてゐる。この以前に於いてラスキンは幾多の美術批評の著書を現はしてゐるが、是等の批評に於いても常に公正（righteousness）と云ふ標準を據點として論じ一八四九年に出版されたThe Seven Lamps of Architecture の中に於いて建築に對する論議が纏められてゐる七燈と云ふのは Sacrifice, Truth, Power, Beauty, Life, Memory, Obedience の七つの德性である。彼の美術批評は屢々社會生活の批評の侵入を蒙つてゐる。從つて一八六〇年はラスキンの性格に於いて決して烈しい變化ではなく（Riverside Literature Series 中の Sesame and Lilies の Introduction, by H. E. S. 參照）彼の性格の當然の徑路であつたであらう。一八六〇年を以つて彼の生涯の一區劃と考へさせるに至つたのは明かに Unto This Last が世間に起した反響の結果であつて其の間の消息は既に昨年十一月號の中央公論誌上で林癸未夫氏が明確に説明して居られる（同誌、社會批評家としてのジョン・ラスキン第十節參照）。

J. A. Hobson は美の創造の立場から出發したラスキンが如何に此の社會生活を眺めたかを簡明に説明してゐる其の中に先きにのべたラスキンの貧困に對する觀察は窺はれる。ホブソンは次の如く云ふ。

『彼が早くから美術の歴史に足を踏み入れてゐた事は製作の健實な狀態と氣高い性格との間に有機的の關係が存在すると云ふ事に對する非常に強い信念を彼に充たした。一個人が爲す所のものは彼が何であるかを決定すると云ふ事は美術と道德の第一原則として彼の心に銘記された。彼が歴史の教訓から轉じて自己の經驗及び彼の師、カーライルの鋭い啓示によつて知り得た所の英吉利の狀態を眺めてみると深い憂鬱、否殆ど絶望の感が彼を襲ふた。大部分、飾い、重苦しい、狹い、機械的の勞働に投げ込まれてしまつた民衆が如何にして彼等の生活や性格に歡びや健康や美を求め入れる事が出來樣か。劣等なる生産は劣等なる消費を意味する、勞働の墮落は生活の墮落を伴ふ。斯の如きがラスキンが彼の周圍に見とめた勞働生活であつた』前掲書八五頁）。美の創造には美の周圍を必要とすると云ふラスキンの主張は、彼の著書 The Two Paths の第三講 Modern Manufacture and Design の第九一節に巧みに描寫されてゐる。『麗しき美術は彼等の周圍に美しき事物を有し更に是等の美を觀察する餘裕のある人々によつてのみ製作される事が出來る』（同書第三講第九十節）と。斯くの如きは決して好運なる少數者の懶惰にして贅澤なる生活によつて救はれるものではない。ラスキンは斯くて社會的、經濟的批評と云ふ仕事の第一歩を踏み出した。下劣なる勞働と無知なる奢侈とは相關連した惡德である。其の根本的原因を深く探求してラスキンは現代の産業組織並びに之れを保持する科學の不公正及び非人間的である事を見出し、熱烈なる非難を加へる至につた（J. A. Hobson, ibid., p. 35）。

ラスキンに從へば富は正しき方向に使用せられて公正なる Mammon とならなければならない。社會の多數の民衆の貧困と對立する少數の富者の奢侈、現代に見るが如き富の消費の方法は決して其の正しき使用ではない。彼等にとつて又社會にとつて虚僞なる價値をしか有さぬ奢侈品の生産に多數の勞働者が使役せられてゐるのが社會にとつて一つの利益であると云ふ考察は最も誤つたものである。以下ラスキンの此の方面の主張を少しく詳細に紹介してみたい。

A Joy For Ever は一八八〇年に出版されてゐるが表題紙に於いて示される樣に之は一八五七年七月十日と十三日の兩日にマンチェスタアに於いて講演せられたものが一度同年 The Political Economy of Art なる書名の下に出版され、之れに他の三つの講演を附加して八十年に出版したものである。從つて此の書の中に論ぜられてゐる所は美を求める事の經濟である。ラスキンは「經濟」とは個人或は社會、その何れを問はず其の勞働を處理する術 (the art of managing labour) であると定義する。經濟とは單に事物其の他のものの節約と云ふ事を意味するのではない、其は一つの家の管理を意味し最も大なる利得を得る樣に或は消費し或は節約する事である、從つて最も簡單な意味で云へば勞働を賢明に處理する事となる。勞働の處理は三つの方面に分れる、即、第一に合理的に勞働を適用する事、第二に其の所產を充分に注意して保存する事、第三に其の所產を適當に處分する事である。(A Joy For Ever, §§, 7, 8.) かゝる經濟活動はその目的とするに於いて二方面に分たれる、一つは效用 (utility) の方面で他は美的享樂 (splendour の方面である。完全なる經濟行爲者或は一家婦 the perfect economist, or mistress of a household) は彼女の注意を此の二大目的の間に平衡を保つ樣に均分する。『凡べて完全なる家計、或は一國經濟は其が完全であるや否やを是等の二つの方面によつて考察せられる。その何れか一つが缺けても其の經濟は不完全なものである』と (Ibid., § 10.)。かくの如くラスキンは經濟を勞働の處理と解する事によつて單に物質的方面に對する人間の行爲のみならず、精神的方面に對する人間の行爲をも其の經濟論の中に取り入れてしまつたのである。A Joy For Ever はこの美的享樂 (splendour) に對する勞働の處理を考究するものであつて、巧みに配分せられたる一農夫の所有地のうち、農耕地よりも彼が草花を栽培せる花園に對する農夫の勞働に就いて研究するものである (§§, 10, 11.)。

かくてラスキンは美術の生產に於いて勞働が適用せらるゝ條件を規定して、(一)種々なる仕事 (二)容易なる仕事、(三)永く殘り得る仕事に對して藝術的才能を適用しなければならぬと敎へた (Ibid., § 31, 35)。是等の條件中第三の點に就いてはラスキンは Pietro di Medici が Michael Angelo に命じて雪の塊に彫刻せしめたのを以つて偉大なる Michael Angeo の勞作を徒らに空費せしむるものであるとなし、從つて單に製作の材料が永存的であるばかりでなく、その現さんとする美其のものの性質が永久的のものでなければならない。故に一時的現象である流行に囚はれてゐる場合には美術殊に工藝美術に偉大なる美の作品は生れない。かくてラスキンは最も甚しき流行の對象たる裝飾美術即ち衣裳に就いて論ずるに當つて美術批評より轉じて社會批評の方面に入つた。偉大なる繪畫史上の時代は同時に其の時代の人々の衣裳に於いても美が表現された時代であるが衣裳の華美殊に今日見るが如き奢侈は決して尊ばれる可きものでない (Ibid., § 54)。吾々は玆に於いてラスキンと共に彼の奢侈に對する考察に入つて行かう。

ラスキンに從へば金錢を費す事は金錢を失ふ事ではない、金錢を費す事は結局其額に應じて多少の勞働者を支配し働かせる事である。かくて如何なる方法に其の金錢を費消するも其は常に何人かを使役し、彼等にある利益を與へてゐるが故に全く利己的な奢侈も實際は利己的なのではなく散ずる金錢の額に從つた、或は其れ以

上の利益若くは善を爲して居るのだと考へる者がある。一つの新しい欲望を發明した者は何んでも社會に對して一善を與へた者であると云ふ事を經濟學の一原則であると主張する愚か者が在る（Ibid., § 48）。

『先づ吾々が目的の如何を問はず兎に角金錢を費した時は常に人々を働かせてゐると云ふ事を認める、而して假に吾々が彼等に與へた仕事が凡べて彼等にとつても等しく健全なものであり有益なものであるや否やの疑問は暫く避けて吾々が一ギニを費す時は何時も一定時の間一定人數の人々に健全な扶持を給するものと假定しやう。然し此の一ギニを費す方法に依つて吾々は此の一定時の間全く是等の人々の勞働を支配するのである。吾々は彼等の主人となり彼等に一定期間内に某々の物品を生産せしめる。が其の物品は有用であり且つ永持ちのするものである事もあらうし或は無用で且つ脆弱なものであるかも知れない、或は全社會にとつて有用なものであるか又は吾々丈にとつて有用なものであるかも知れない。而して吾々の我利心や愚蒙或は吾々の德性や深慮は吾々が金錢を消費したと云ふ事によつて示されないで之を誤れるものにか或は正しきものにか、その何づれに對して費したかと云ふ事によつて分明するのである。一定期間幾名かの人々を扶持したに於て吾々は賢明であり深切であるのではない、たゞ此の期間中に彼等をして單に吾々丈けにとつて有用な事物を生産せしめないで社會にとつて有用である可き性質の事物を生産せしめたと云ふ事に於いて賢明であり深切なのである』（Ibid., § 49）。

ラスキンに據れば斯かる誤つた考、即衣裳や家具の如きに對して富者の行ふ奢侈が社會の貧民にとつて一つの利益であると云ふ謬論は單に世人の懷く所のみならず經濟學者すら其の誤謬を指摘する態度に出てゐない。ラスキンは云ふ、

『一八五七年と云ふ早い頃から自分は此の錯誤の性質を示し其の危險である事の警告を與へるのに全力を盡して來た。然るに何人も、彼等の言葉を熟心になつて聽く愚かな耳を持つた人々を控へてゐるのに、商業の權力に向つての攻擊であつたに違ひない說を主張する自分の後に從つて來る者はなかつた』（Munera Pulveris, preface of 1871）。

彼は又 A Joy Fvor Euerの補遺註第五（Note 5th in addenda）に於いて若し經濟學者が、文明生活の活動力や精練や同時に其の富なぞが虛想的な欲望から生じたものであると云ふ、一部分丈けにしか根據のない觀念によりて迷はされる事がなかつたならば、斯くの如き錯誤を忍ぶと云ふ事も彼等にとつて永くは不可能であるであらうと云ひ乍ら其の脚註に於いて、『自分は斯く云ふ事に於いて餘り多くの信用を經濟學者に置き過ぎてゐた』と附加してゐる。

成程、食物や衣住や睡眠以外に何等必要を感じない未開人が文明生活の贅澤品を得たいと絕えず勞働してゐる人間に比べて遙か劣等の狀態に在る事も、亦一國と他國との發展力の相違が大部分無駄な欲望の存在に懸つてゐると云ふ事も共に事實である。ラスキンは必しも奢侈の絕對的禁止を叫ぶ者ではない。しかし、『是等の怠惰なる動機は單に國民の身體と精神に練習を與へるものに過ぎないと考へらる可きである、是等は勤勉と取得心の習慣を與へると云ふ點以外では決して富の源泉となるものではない。』

迂愚なる性質の新しい欲望に一國民の時間と勞働とを空費する事は間接に有益なる發見や高尙な美術を生み出す事となるかも知れない、故

に『一國民が非常に貧弱であるか或は愚蒙であるので氣まぐれ以外の動機では働かず又眞面目な仕事に先づ手を着ける事が出來ないと云ふならば別に是等のまぐれ氣を非認する要はない。一國民が鐵を造る事が出來ないでラヴェンダアから香水を採る事丈けが好きだと云ふならば其の國民に出來る丈けラヴェンダアを與へるがいゝ。然し其の經濟論者をしてラヴェンダアは國民にとつて燕麥程有益なものであり其は貧者の生活の助けとなるものであると考へさせてはならない』(Ibid.)。

かくてラスキンは茲では嬌艶と恩惠とを混同し自己を欺いて吾々の纏ふ美衣は何づれも空腹を訴へる下層の者の口中に之れに相當する丈けのものを入れてやるのであると考へてはならないと注意を與へてゐるが (A Joy For Ever, §50.)、ラスキンは單に奢侈生活と恩惠との混同を非難する丈けには止まらない、彼は進んで是等の美衣は其れに相當する丈けのものが彼等の口中に入れられた事を示すのではなくて反對に其れ丈けのものが彼等の口中から取り去られた事を意味するのである」(同上) と說き貧困と富裕とがかくも甚しく隔絕するの社會生活に於いては奢侈は寧ろ罪惡であると主張してゐる。次に此の點に關して觀察してみやう。(未完)

ウヰリアム・モリスの觀たる中世經濟生活 (上)

加田哲二

一

藝術に對する好愛と歷史の研究の結果から社會主義者となつたウヰリアム・モリスは他の社會主義者と異つた中世紀觀の持主であつた。即ち、資本主義は社會主義と比較するときは、一の害惡である。けれども小規模產業と束縛を蒙つてゐた小規模生產者が官僚の慈悲によつて存在してゐた中世主義に比較すれば幸福である」とするニコライ・レーニンと立場を異にする、(New Policies of Soviet Russia, The Meaning of the Agricultural Tax, by N. Lenin. p. 37) 然るにモリスは、その暴行の行使と權威(オーソリティ)の否認を極力攻擊した無政府主義者のあるものと同じ立場にゐた。クロポトキンは云つてゐる。「中世都市を明かにするに從つて、吾々は益々、それが單純に或る種の政治的自由の保護を目的とする一政治組織に止まらなかつた事を知るのである。即ちそれは、共產村落に於けるよりも、より大きな規模の上に相互扶助と相互支持との爲めの、消費と生產との爲めの、さうして又全社會生活のための緊密な團結を組織して、しかも同時に人々の上に國家の桎梏を課する事なしに、藝術や、手工や、科學や、商業などに於ける個人の各團體と政治團體との創造的天禀に十分な表現の自由を與へうとする企てゞあつた」。(クロポトキン著大杉榮譯相互扶助論二六三—二六四)

中世都市を斯くの如くに解するクロポトキンの態度はまたモリスの態度であつた (クロポトキンの「相互扶助論」における中世紀論とモリスの觀方とが類似してゐることは、以上の引用並に以下のモリスの所論に照して明かである。モリスの中世紀觀はラスキンの研究によつて形成されたことは屢々他の機會において論じた。中世紀觀の發表に就いては、モリスの方がクロポトキンよりは少し早いやうである。即ちバックスとの共著「社會主義」は千八百九十三年の刊行である。然るにクロポトキンの相互扶助論が個